

魔のもの

Folk Tale

佐藤春夫

「やぶぢちゃん注」大正一一（一九二二）年四月発行の『新小説』に発表され、後に佐藤春夫最初の童話集となった「蝗の大旅行」（改造社昭和元（一九二六）年九月刊）に所収された。国立国会図書館蔵の昭和七（一九三二）年春陽堂刊の「少年文庫 3」版を底本としたが、総ルビであるため、読みが振れると判断した箇所へのみのパラルビで電子化した。本「魔のもの」を載せている国書刊行会一九九二年刊須永朝彦編「日本幻想文学集成」の第十一巻「佐藤春夫」の、編者須永氏の解説によれば（引用部は恣意的に正字化した）、『退屈讀本』所収の「わが父わが母及びその子われ」に「私は母に抱かれて幾つかの傳統的な怪異な話を覚えてゐる」とあるから左様なものゝ一つかとも推測してみるが、粉本の有無は不詳」とある。

なお、この「日本幻想文学集成」は初出に拠っている者と思われ、本テキストと表記の一部や句読点及び改行に異同がある。内容的にそれを逐一記す必要性は感じないが、一箇所だけ、三話目の、「——さう言つて、その若い衆の妹が今でも泣いて話すが、これや愚痴とは言へまい……」という一文の後、「早う汽車がとほるとええなあ、と、そこでわしが言うたことぢや。」が入るが、これは私の底本としたものでは改頁となつているものの、視認する限りでは一行空けがない。しかし、話術の流れから、ここのみ須永編の「日本幻想文学集成」をよしとして一行空けとした。また、アスタリスクを二行に配した分節箇所は、前後の文章にちらつて稍読み難く感じるため、前後に空行を設けてある。

影絵の切り絵の挿絵が入るが、作者不詳であり、著作権を考へて省略した。

本テキストは私のブログの六十五万アクセス突破記念として作成した。【二〇一五年一月九日

魔のもの

Folk Tale

もう八つの刻くわくだつたらう——

とほとほと、坂路を下りて居ると、ピカリと不意に光つたものがある。——松の梢こずえのてつぺんどや。ハツと、そこへ思はずひれ伏してしまった。

「六根清浄々々々々々々々……」

手を合はしてから、ちらりと一目拜とむと、鳥のやうな足ぢや。羽根をひろげての——。天狗てんぐさまがぐいならつしやる。息もつかずに居た。おそろおそろ、もう一度、そつと、首をちぢめたままで見上げると、もう、何も無い、ほ——つと思つて、もう一度、ゆつくり見上げると本當にもう何も無い。

——もくさんに林のなかからかけて下りて、やつとの思ひで村へ出た。

——あれやあ、本當の天狗さまぢやらう。

*

*

*

*

*

*

*

六甲むかしん越で丹羽へ出ようと思つとつた。峰一つ越えてしまつて、もう少しのことで人里ひとだつた。

月が出てゐたがの。

その長い一本道を、いきなりスーッと来て通つた、ゴオーと言つて地鳴りがしたやうにも思つたがのう、荷物も、商賣ものの灰もあつたものぢやない、身一つで竹藪のなかへすくみ込んだ。

夜は魔のものといふが、そりや、えらいものぢや、通つたあとがといふと、お前、あたり一めんの蓮華畑に、一すぢ、幅が三尺ほど、そこだけ刈り取りでもしたやうに、帯になつて、蓮華の花が綺麗に切れてしまつてゐるのだ。

——いや、四つ足ぢやない。さあ？ 長ものでもない。鱗もありやせん。いや、ただもう、三丈もあらうかといふかたまりなのぢや、黒いものぢや、影のかたまりぢや。

さうさ、幽霊ぢやらうかのう。お化けぢやらうかのう。さあ、何やら知らんが、何にせ、まあ、それがその魔のもので、つまりは今だに正體が知れんのぢや……て。

* * * * *

その谷といふのがその、各うての魔所なので、ひとり旅などをするものはもとより、つれのある衆でも、そこまで来ると、ふいとその谷のなかへ上の道からをどり込んだりするのだ。夕がたなどは論外だが、晝日中でもそれだ。——いきなりひき込まれるのはまだたちのいい方ぢや。一度などはこんなことがあつた——。

次の村で話し込んで夕方になつて出かけた若い衆が、その晩になつても、朝になつても、その次の夕方になつても歸らぬ。さあへんだといふのでさがして見ると、案のとほり、その谷へ墜ち込んでゐる。體は、今さらぢやないが目もあてられない。で、一番妙なことはといふと、たかが一里もない手前の齋味のうちで新らしくはかせたわらぢが、二十里も歩いて來たやうにぐしやくしやにはきつぶれてゐた。——そんなに遠道を、どこをどう歩いて來たやらそれがとんとわからない。——さう言つて、その若い衆の妹が今でも泣いて話すが、こ

れや愚痴とは言へまい……

早う汽車がとほるとええなあ、と、そこでわしが言うたことぢや。

*

*

*

*

*

*

村中の人が雪の上で焚火をして、手に手に得ものを持つてゐるところだつた。聞くと、今夜こそは是非とも一つあれをどうかしてくれようと言つてゐる……

その晩はえらい騒動ぢやつたて。たうとう丑満すぎになつてわなに落ちた。つかまへて見ると、それは二尺あるなしの四つ足なのだ、見たところは山犬に似てゐるが、ぢやが山犬でもない。てんでもない。白い毛のふさふさしたものぢや。捉まつても割合に神妙にして居つた。ちよつとその邊では見なれないものぢやと言つた。わしも見たことのないものぢやつた。もう夜中であつたしそれにめづらしい奴ぢやといふので、村の衆はそれをとにかくも生けて置くことにした。それで、どこから持ち出したのか、こんな太い丸太を組み合した。さうして、その隙間といつたら、それこそ指二本とはそろへて這入らぬ檻のなかへ、そいつを投り込みをつた。それから獵につかふ犬を皆そこへ張番させて置いた——これや、私もちやんと見たのぢや。

——ところが、やつぱり魔のものぢやつたのぢや。明の日になつて見ると、もう影も形もあるものぢやない。——その檻はちやんとそつくり頑丈にのこつてゐるのぢやげにな。なにさ、やつぱり魔のものぢやつたのぢやげう……

*

*

*

*

*

*

*

この村に、むかしから魔の住んどる家が三軒あるのぢや。一軒はそれ、あの高いくぬぎの下
の家ぢや。もう一軒は、馬方の馬屋のねぎにあるめの空き家ぢや。——あれが「ばん悪いて、
それからもう一軒はな、——さうさ、ええ、もう言うてしまへ——お前のうちぢやがな……

「やぶちゃん注：「六根清淨」以下の「々」の記号部分には底本では六回分の踊り字「へ」
が入っている。これは「ろつこん」と「しやうじやう」を分割した繰り返し表記と思われる、
朗読される際には、最低でも三回以上（リーダーがある）は必ず、お願いしたい。

「ねき」根際。側。傍ら。」